

「初等音楽科内容構成研究」授業実践報告

—演奏表現の理解と技術習得—

佐々木直樹*

Naoki SASAKI

A Practical Report on "Study on Teaching Contents of Elementary Music"
—Understanding of Performance Expression and Technical Acquisition—

1. はじめに

「初等音楽科内容構成研究」の授業は、小学校教諭を目指す初等教育開発専攻・副専攻および人間生活環境教育専攻の学生を対象に開講している。授業は、声楽とピアノの教科専門教員が二人ずつ、4人が担当しており、小学校の歌唱共通教材の歌唱および伴奏の演習により、歌唱力、ピアノ演奏力を養い、音楽の基礎的な演奏技術の習得を目標としている。授業の特色としては、いくつかのグループに分けての歌唱練習や合唱活動があり、相互指導や協力による活動を通して、協調性・自主性を養い、多様な音楽表現力の体得を目指しているところにある。初等教育教員養成カリキュラムの限られた時間で、特殊な技術を必要とする実技科目を修得するという厳しい状況の中、いかに教員養成教育をおこなっているか、授業内容を分析し、紹介していきたいと思う。

以下、本報告は、初等音楽に関するカリキュラム構造、「初等音楽科内容構成研究」のシラバス、授業展開・授業実践の分析、の順に述べていく。

2. 初等音楽に関するカリキュラム構造

芸術表現教育講座音楽教育専攻で初等教育のために開講されている授業科目は、「初等音楽科教育法概説」と「初等音楽科内容構成研究」の2科目である。

「初等音楽科教育法概説」は、免許法の「各教科の指導法（初等）」に該当し、音楽教育史の理解や学習指導要領の分析、および共通教材の演習など、音楽教育の理論的な点と個々の教材研究を重視している。一方、「初等音楽科内容構成研究」は、免許法の「教科に関する科目・音楽（初等・幼児）」に該当し、歌唱力やピアノ演奏力、読譜力などを、演習を通して養うことで、教育現場に対応できる表現能力の習得を目的とし、実技を重視している。

本報告の「初等音楽科内容構成研究」は、1年後期に初等教育開発専攻の学生を対象に開講され、2年前期には初等教育開発専攻副専攻、人間生活環境教育専攻学生をはじめとする、初等教育開発専攻以外の学生を対象に開講される。3年次の教育実習への準備、および教員採用試験を意識した開講時期・授業内容となっている。授

業は、声楽専門とピアノ専門の教員が複数の教室に分かれ、学生が一人ずつ指導を受けに入室する方法で、短時間ではあるが個別に指導をおこなっている。個別指導を受けていない間、学生はグループ活動による合唱練習をおこない、最後の授業でグループごとに発表する場を設けている。

「初等音楽科教育法概説」の開講時期が2年前期となっており、初等音楽の2科目を同時期に履修することで、音楽の理論と実技をバランスよく履修し、基礎的な指導力を培うことができるようにカリキュラムが組まれている。

実技科目である音楽の授業において、言葉での説明のみで授業を進めることは困難であり、演奏を伴った指導が必要となる。「初等音楽科内容構成研究」の授業では、教育現場での指導を想定し、演奏表現の理解と技術習得を目標としているが、演奏技術の向上のみを目指すのではなく、小学校学習指導要領の目標¹にある、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育て、豊かな情操を養う音楽授業を展開できる教員を養成するために、学生自ら音楽の魅力や美的感覚を感じることを目指し、授業担当教員の白石由美子氏が「保育者養成校における『表現』指導について」²で述べている教員養成教育の在り方、「音楽の〈美的体験の場〉」をねらいの一つとしている。小学校音楽科の目標については、「表現及び鑑賞の活動を通して」とあり、多様な音楽を幅広く直接体験することが大切であることを示している³のであるが、本授業では表現活動について体験的に学び、教員採用試験の実技内容を踏まえ、弾き歌いができる演奏技術の習得という目的をもち、授業を構成している。

3. 「初等音楽科内容構成研究」のシラバス

シラバスには、授業の目的として、「小学校音楽科の教育現場に対応できる音楽の基礎的な知識および表現能力を習得します。小学校の歌唱共通教材を用いたピアノによる弾き歌いの演習を通じて、読譜力、歌唱力、ピアノ演奏力を養うとともに、合唱などグループ学習の積極的な導入により、相互指導、創造力、合唱合奏の楽しさを学び、それらの体験を通して協調性、自主性を養い、小学校教員としての多様な音楽表現力を身につけます」と記述している。達成目標としては、以下の4点を挙げ

* 鳥根大学教育学部芸術表現教育講座

ている。

- a. おもな歌唱共通教材について弾き歌いができる
- b. ピアノに関する基礎的な知識・技術を身につけ、バイエル70番以降の曲を弾くことができる
- c. 範唱するために必要な声楽の知識・技術を身につけている
- d. グループ活動として少人数の合唱に取り組み、期末に発表することができる。

授業は、声楽とピアノの個人実技レッスンを中心に進められ、レッスン以外の時間をグループ合唱練習にし、声楽とピアノの演奏技術がある程度向上した段階で、弾き歌いの指導がおこなわれる。発表では、独唱、ピアノ演奏、弾き歌い、グループ合唱の4種の実技をおこない、総合的に評価する。

4. 授業展開

授業の進め方と内容について、学生が実技演習に取り組み、音楽を理解していく過程について紹介する。

1) アンケートによる学生の把握とグループ編成

大学入学までの音楽経験の年数や種類には個人差があり、授業での理解度や習得の進度に差が出るため、個人の演奏力を把握し、指導方法や選曲について、個別に対応しなければならない。またグループは、合唱活動のメンバーとなるため、各グループの構成メンバーのバランスをとるためにも、アンケートによる事前調査が必要となる。

2) ピアノの個別指導による徹底した技術向上

初等教育開発専攻の受講生が約50名、副専攻および人間生活環境教育専攻の受講生が約20名となっており、初等教育開発専攻の学生を対象とする後期授業は、個別に指導をおこなうには厳しい状況となっているのであるが、時間のかかる初期段階の学生を優先した集団指導や個別指導の順番の工夫、個人練習に対する的確な助言、授業時間外での補講による対応により、ある程度演奏できる段階まで、懇切丁寧な指導をおこなうことで、本人にやる気を起こさせる指導を工夫している。ピアノ演奏の技術を身につけるためには、多くの時間と労力を必要とするのであるが、半期15回の少ない授業時数の中で、全く演奏できない学生でも一曲演奏できるようになることを可能にしている。

3) 集団および個別による声楽指導

小学校の歌唱共通教材を指導するために必要な声楽の知識や歌唱力を身につけることを目標にしているのであるが、独唱することへの抵抗感をもつ学生や声にコンプレックスをもっている学生など、個々の状況は様々である。個別に対応することが難しい中で、十分な指導をおこなうために、声楽担当教員である白石氏の指導理念に基づき、グループごとの集団レッスンを組み入れ、共有体験、相互指導の効果を指導に取り入れることで、他の学生の前で独唱発表できる段階まで至っている。

4) グループ活動による合唱発表

グループごとに、取り組む合唱曲を選曲する。毎回の授業で人気の高い曲や、教員が推薦する曲も紹介し、最終的には学生自身で演奏曲を決定する。各グループには、音楽的にリードできる学生や、伴奏等でサポートできる学生を、バランスよく配置しており、その学生を中心に、自主的な練習によって、演奏を仕上げていく。授業では中間発表をおこない、お互いに他のグループの合唱演奏を聴くことで、競争意識が起き、その後さらに積極的な取り組みがなされる傾向にある。この活動にも、白石氏の述べる仲間意識や共有体験、相互指導があり、グループごとに発表することで、加えて相互批評やグループ間競争意識が働き、歌唱やピアノ演奏も含め、授業効果をあげている。

5. 授業実践

筆者の専門である声楽の部分について、授業実践を分析すると、以下の3点をもとに指導がおこなわれている。

1) 発声練習

全体指導やグループ指導の中で、一緒に大きな声を出す体験をすることで、日常の会話時には発することの少ない、力強い声帯振動をともなった発声をおこない、発声器官に刺激を与え、歌唱の準備段階となる。適宜注意点を伝えるとともに助言を行い、発声をより良い方向へと導く。

2) 詩の表現

課題となる歌曲作品として、比較的容易なイタリア歌曲から選曲し、発音の説明とともに詩の内容を説明する。詩から感じられる世界について、個人個人のイメージを作らせることで、楽譜上の音楽を正確に演奏するだけではなく、感情表現からくる演奏表現の在り方について指導をおこなう。

3) 歌唱技術と表現

詩の世界を伝える手段として、演奏表現のための発声方法や歌唱技術について、個別に指導をおこない、演奏表現力の向上を目指す。

最初から、声楽発声にとって難しい日本の歌曲作品をとり上げるのではなく、イタリア語による歌曲を演奏することで、会話発声ではない声楽発声による歌唱体験への導入としている。声楽の基本と表現の大切さを理解した上で、歌唱共通教材の表現について、個々の学生の状況に合わせた指導をおこなっている。

6. まとめ

「初等音楽科内容構成研究」の授業内容について紹介するにあたり、あらためて分析し確認することとなった。個別に指導することが最善の方法とされる実技指導科目において、限られた時間と受講人数の多さに、どのように対応し授業を展開するのが理想なのかについては、今後も追求していかなければならない。現在の授業内容お

よび展開では、学生が習得できる歌唱力やピアノ演奏力について十分なものとはいえず、歌唱共通教材の理解についても不十分である。しかし、授業の最後に多くの学生の前で堂々と歌唱する学生の姿には、演奏表現への自信が感じられ、ピアノを最後まで演奏しきろうとする姿勢や曲を自分なりに表現しようとする姿勢、そして仲間同士で互いに賛美しあう様子には、音楽を楽しむ気持ちや、表現に対する意気込みが表れている。この良い音楽体験が、今後の自主的な学びへと促す原動力になると考える。

小学校学習指導要領にある表現領域についての各事項を充足できる指導のためには、様々な知識と経験、および高度な演奏技術を必要とする⁴が、少なくとも、(イ)音楽を感じ取って歌唱の表現・器楽の表現を工夫する能力を育てる事項、(ウ)楽曲に合った表現に必要な基礎的な歌い方・演奏の仕方について示した事項⁵については、音楽表現に対する理解とそれにとまわられた演奏技術により、指導が可能であると考え。他の事項についても、音楽に対する積極的な姿勢により、指導力が身につく部分も多く、指導者自身が音楽を楽しみ、愛好する心情をもち続けることが大切となる。

「初等音楽科内容構成研究」は、教科専門教員による授業ではあるが、実技習得のための指導とともに、教科教育の内容を充足する科目として、音楽を指導するための知識や感性についても重要視し、教材の演奏方法や演奏技術を教えることにとどまらず、音楽の授業を通し児童に感動的な体験を与えることのできる教員の養成を目指している。

引用および参考文献

1. 『小学校学習指導要領 平成20年3月 告示』, 文部科学省, 東京書籍, (2008).
2. 白石由美子, 「保育者養成校における『表現』指導について—実践報告と考察—」, 全国大学音楽教育学会研究紀要, 3, 75-84, (1992).
3. 『小学校学習指導要領解説音楽編 平成20年8月』, 文部科学省, 教育芸術社, (2008).
4. 佐々木直樹, 「教員養成課程における発声指導の考察(1)—歌唱姿勢に着目した発声指導—」, 島根大学教育臨床総合研究, 9, 179-190, (2010).
5. 『最新 初等科音楽教育法』, 初等科音楽教育研究会, 音楽之友社, (2009).